

唐王朝の天子たちの書

太宗のあとの大天子たちは、二王を典型として行草書を書いたが、直接手本にしたのは太宗の書であった。

天子たちの書は二王の書を基本にしているが、それは、王羲之を酷愛した太宗の影響からであつたと思われる。しかし、二王の伝統の崩れは、すでに歐陽詢、褚遂良、歐陽通らの書に見られるだけでなく、王朝の内部からも次第に崩れつつあった。それは天子たちが王法の書以外に、好んで篆隸書を書いたことに表れている。

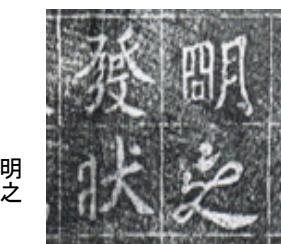
景龍觀鐘銘

(唐・睿宗)

景雲二年(711)

楷書。鐘に刻されている。全292字。

篆隸の筆勢や雑体書が見える。



明之
發狀

玄宗

(685-762)

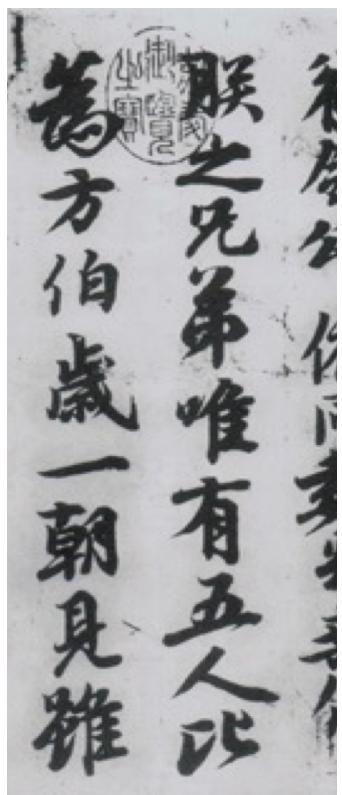
在位は

(712-756)

唐の第6代皇帝。睿宗の第3子。諱は隆基。在位45年のはじめは「開元の治」とよばれ、善政を敷き、唐の最盛期をもたらし、文化の爛熟、天下太平の世をつくりだした。開元の治は姚崇や宋璟ら優れた宰相に恵まれたことによつてもたらされた。しかし、玄宗は後半生、政治に飽き、堕落して、動乱の世をまねき、唐朝滅亡の原因をつくつた。737年に寵妃の武惠妃が死に740年に楊貴妃に出会つてから後、唐朝は坂道を転げるようになくかう。

鵠鵠頌

(唐・玄宗)



紀泰山銘 (唐・玄宗) 開元14年(726) 磨崖碑 隸書

玄宗は唐の隸書のスタイルを確立した。たっぷりとした太い点画で、波磔を強調している。

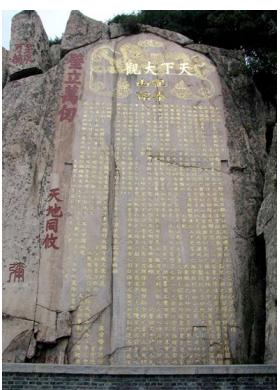


字大約14cm、996字、

高さ約13m

幅約5m。

玄宗が泰山に封禅したときに彫られた。山東省泰山の東嶽廟の岸壁にある。



石台孝經（唐・玄宗）天宝4年（745）玄宗独特的隸書。



上古冥風朴略
移恋之道昭矣
公侯伯子男

楊貴妃（719—756年6月14日）

玄宗皇帝の妃。蜀で生まれたらしい。庶民の出身か？名は玉環。ぎょくかん傾國の美女と呼ばれ、世界三大美人、中国四大美人の一人とされている。音楽、歌舞に優れ、かしこくおとなしく、かわいらしかったという。太ついたらしい。

開元23年（735）玄宗と武惠妃の子の寿王じゅおう（玄宗の第18皇子）の妃となつた（16歳）。

開元25年（737）武惠妃死去。

開元28年（740）玉環、驪山の北麓にある、玄宗の避寒地の温泉宮かせいちやう（華清池）で女道士になり号を太真たいしんと名乗り、

玄宗と内縁関係になつた（21歳）。この後、毎年、冬を玄宗と楊貴妃はこの華清宮で過ごした。

天宝4載（745）楊太真、貴妃に冊立さとりされる（26歳）。玄宗は61歳。

※「載」さいとは数の単位の一つだが、ここでは年（歳）のこと。「千載一遇」の載と同じ。

「千載」せんさいは千年のことである。「一遇」いよしは一度出会う意。

天宝15載（756）長安から逃げる途中、馬嵬ばかい（陝西省興平県）で縊死させられた（38歳）。



華清池



唐代の後宮制度

後宮とは、宮廷内での天子の家庭生活の場所のことである。皇后以下、妃妾、多くの女官や宦官たちが暮らしていた。職官は内侍省（宦官たち）の三部門に分かれていた。

内官は皇后を頂点にして以下の順位が決まっていた。

（妃妾のこと） 宮官（正六品以下の女官たちで、宮中の職務にたずさわる） 内侍省（宦官たち）

四夫人（貴妃・淑妃・德妃・賢妃・正一品） 九嬪（昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・充儀・充容・充媛・正二品） 二十七世婦（婕妤9人・美人9人・才人9人・正三品～正五品） 八十一御妻（宝林27人・御女27人・采女27人・正六品～正八品） さらに下に下級官女がつづく。



楊貴妃觀音像
(泉涌寺)

篆隸への関心

天子たち同様、一般にも篆隸への関心が高まってきた。李潮・韓擇木・史惟則など隸書の名家が現れ、つづいて篆書の大家である李陽冰が現れた。二王の典型が崩れてきた現れであると考えられる。

大智神師碑（史惟則・開元24年）736年

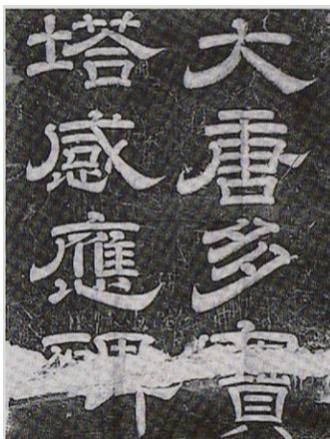


崇陽觀碑 徐浩・天寶3載(744年)

唐代隸書の典型的の一つと言われている。徐浩は「多宝塔碑」の題額の隸書を書いている。



多宝塔碑題額
(天寶11年・752)

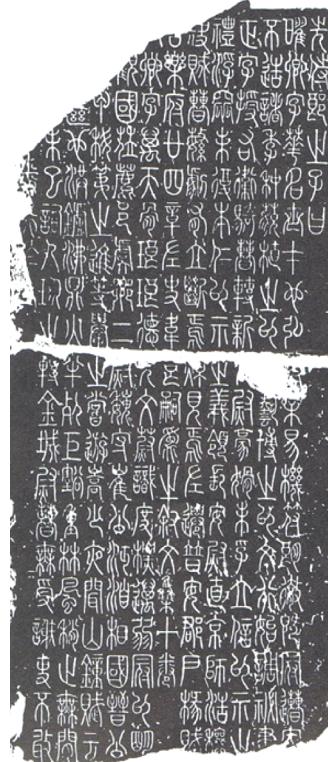


李陽冰（生没年不詳）河北省の出身。本名は李潮。唐代隸書の名手で篆書の天才と称えられた。二王以前の篆隸の世界に戻り、

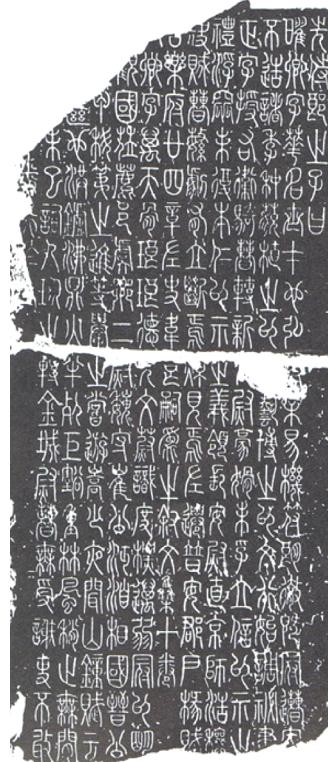
装飾的なデザイン文字に堕落していた篆書を、本格的な秦代の小篆に復活させようとした。李陽冰の後、篆書による本格的な書作品が創られるようになった。篆書を芸術として復活させた大芸術家である。李白の従叔（父の従兄弟・おじさん）と伝えられているが、関係がないようである。李姓は13系統あつたらしく王、張と並んで最も多い姓であるらしい。759～762年宣州当塗（今の安徽省宣城市）の県令であったとき李白を援け、762年11月自分の家でその死を一人で看取り、ばらばらになつて残されていた詩稿を詩集『草堂集』10巻に編纂し、その序文も書いた。いま、李白の詩が読めるのは、李陽冰のおかげなのである。

李氏三噴記（767）小篆 「三噴記」とも呼ばれる。李陽冰の親戚であった李曜卿たち三兄弟を讃えた墓碑銘。装飾化されて崩れた篆書ではなく、本来の篆書に近い謹厳な書風である。玉筋篆。210×82cm 碑陽は13行、各行20字。碑陰は11行、各行20字

西安碑林藏



先侍郎之 曜卿字華



先侍郎之 曜卿字華

李陽冰は秦の李斯の嶧山刻石の法を学んでから後30年間、小篆だけを追究し一家をなしたと伝えられている。また、篆書の古碑や許慎の『說文解字』を参照して秦代の篆書を復活させようとしたらしい。

般若台題記(772)小篆

772

「般若台記」「般若台銘」とも呼ぶ。全24字だが、原刻として残る貴重な作品である。

福建省

福州の烏石山の絶壁に在る磨崖碑。内容は寺院名と建立者の名前を記したもの。

本格的な書風である。唐代の篆書を伝えるたいへん貴重なものである。



滑台新駅記(774)小篆 明初に重刻されたもの。火事で焼失した滑州駅の再建の情況を記したもの。

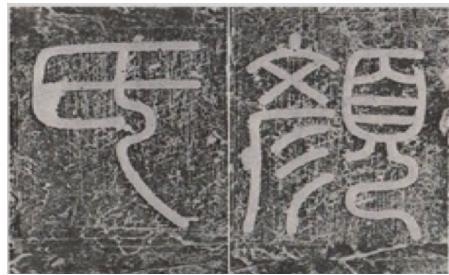


崔祐甫墓誌蓋記(780)篆額部 65×65 cmが李陽冰の玉筋篆である。

4行、各行3字。原刻で貴重な作品である。開封市博物館蔵。



顔氏家廟碑の篆額
780



顔真卿

(709—785)

字は清臣

顔平原・顔魯公とも呼ばれる。琅邪臨沂(今の山東省臨沂県)の顔氏の出身。生ま

れたのは長安。先祖は孔子の十大弟子のひとり顔回(顔淵)と言われる。五代の祖・顔之推は『顔氏家訓』を著した。之推

である。

顔氏は学者、能書家の家系から「学家」と言られた。五代の祖・顔之推は『顔氏家訓』を著した。之推

の孫の顔師古は『顔氏字様』を著し、また孔穎達らと『五經正義』を撰した。曾祖父の顔勤礼は訓詁に詳しく述べてある。

顔勤礼は訓詁に詳しく述べてある。

の孫の顔師古は『顔氏字様』を著し、また孔穎達らと『五經正義』を撰した。

曾祖父の顔勤礼は訓詁に詳しく述べてある。

の孫の顔師古は『顔氏字様』を著し、また孔穎達らと『五經正義』を撰した。

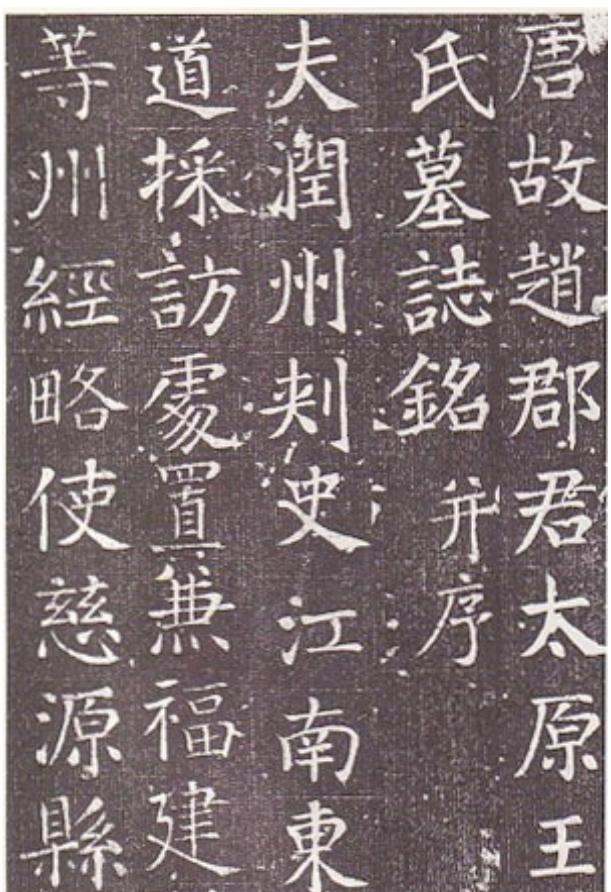
顔真卿の書は、前期(50歳以前)中期(50~65歳)後期(65歳以上)に分けられる。

王琳墓誌(741・開元29年)33歳の現存最早期の楷書。2003年洛陽龍門鎮張溝村の工事現場で出土した。
32行、満行32字、全913字 約90×90cm 初唐の三大家の影響が大きな作で顔法はまだ見えない。



顔真卿の書は、前期(50歳以前)中期(50~65歳)後期(65歳以上)に分けられる。

※「訓詁」・古代の言語を解釈すること。「訓」は解釈、「詁」は古語の意。「訓詁学」は語の意味を研究する分野の言語学。



朔

史

書

尚

丑夏六月甲午朔十有
五日戊申銀青光祿大
夫守工部尚書兼御史
大夫蜀郡大都督府長
史上柱國郭公薨于蜀

府

砾法（右はらい）に
見られるが、ほとん
どし燕尾（えんび）の気配が
ある。

貞

上

有

卷之三

郭虛己墓誌(天寶9載・750)

楷書 42 歳 1997 年河南省偃師首陽山で出土。42 歳の楷書。

42 歳の楷書。
107 × 104 cm
35 行、

多寶塔碑

(天宝 11載・752) 楷書 44歳

楚金禪師が長安の千福寺に舍利塔を建立した経緯を記した碑である。

岑勳

しんくん

の撰。題額は徐浩の隸書。34行、満行66字、全約2000字。碑高は約239cm、幅127cm、龜趺があり、全高は3mに近い。文字面の全拓整本は約185×97cmである。この碑は、もと陝西省興平県の千福寺にあつたが、今は西安碑林にある。

大唐西京千福寺多寶佛
塔感應碑文

南陽岑勳撰

朝議郎

判尚書武部員外郎琅

邪顏真卿書

朝散大

之

特徴

燕尾の萌芽

左払いを細くして右払いを太くする

界

木

山王

百年

圓

十

手

不

華

蟻

月

横画の收筆の按筆

横画が藏鋒になつているものがある

法

流

況

三千七十

中

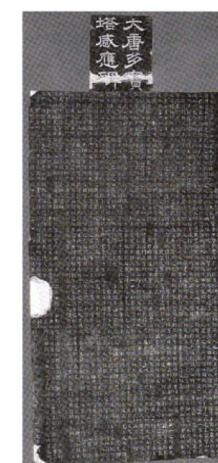
百

同

開

明

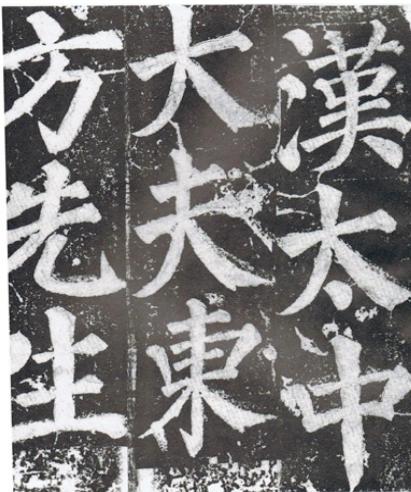
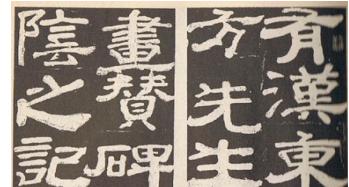
明



整本

碑陰とともに各行 15 行、両側は各行 3 行、各行 30 字。261 × 102 cm。山東省陵縣の「文博苑」に現存する。

顔真卿が楊国忠に左遷され、平原太守に任じたときの書である。東方朔画贊とは、漢の武帝に仕えた東方朔という奇人の肖像画に西晋の夏侯湛かこうたんが贊文を加えたものをいう。「安史の乱」前夜の作品。この作品によつて、顔真卿は王羲之の典型から脱し、個性的な顔法を発見したと思われる。



書道もろもろ塾 4-3

王羲之の小楷
「東方朔画贊」(356)

新しい用筆法

直筆主体の腕腕法で書いたと思われる。王法は指掌法しじょうほうといい腕だけでなく指も動かし、筆を八方に動かす方法だったと思われる。どちらも藏鋒を基本とする。顔真卿は顔家の伝わる篆・籀の筆法や李陽冰の影響を受けて篆法を取り入れた。それは、古代復興の時代精神の表れだったと思われる。

人馬先生事漢武帝漢書具載韓博士達思周變通以爲湯世不可以富位苟出不以直道也故顔抗以傲世不可以垂訓故正諫故談諧以取容索其道而其跡清其質而博物觸類多能合變以明讚以知來

人馬先生事漢武帝漢書具載韓博士達思周變通以爲湯世不可以富位苟出不以直道也故顔抗以傲世不可以垂訓故正諫故談諧以取容索其道而其跡清其質而博物觸類多能合變以明讚以知來

素九立陰陽而綱之學百家衆流之論周給敏捷之辨枝離覆達之數經脉藥石之藝射御書

筆を八方に動かす方法だつたと思われる。どちらも藏鋒を基本とする。顔真卿は顔家の伝わる篆・籀の筆法や李陽冰の影響を受けて篆法を取り入れた。それは、古代復興の時代精神の表れだったと思われる。

筆を八方に動かす方法だつたと思われる。どちらも藏鋒を基本とする。顔真卿は顔家の伝わる篆・籀の筆法や李陽冰の影響を受けて篆法を取り入れた。それは、古代復興の時代精神の表れだったと思われる。

書道もろもろ塾 4-3

王羲之の小楷
「東方朔画贊」(356)

新しい用筆法

直筆主体の腕腕法で書いたと思われる。王法は指掌法しじょうほうといい腕だけでなく指も動かし、筆を八方に動かす方法だつたと思われる。どちらも藏鋒を基本とする。顔真卿は顔家の伝わる篆・籀の筆法や李陽冰の影響を受けて篆法を取り入れた。それは、古代復興の時代精神の表れだったと思われる。

人馬先生事漢武帝漢書具載韓博士達思周變通以爲湯世不可以富位苟出不以直道也故顔抗以傲世不可以垂訓故正諫故談諧以取容索其道而其跡清其質而博物觸類多能合變以明讚以知來

人馬先生事漢武帝漢書具載韓博士達思周變通以爲湯世不可以富位苟出不以直道也故顔抗以傲世不可以垂訓故正諫故談諧以取容索其道而其跡清其質而博物觸類多能合變以明讚以知來

素九立陰陽而綱之學百家衆流之論周給敏捷之辨枝離覆達之數經脉藥石之藝射御書